

死そして生を考える

死そして生を考える

——国境を超えた “いのち” の学び——

田代俊孝

ただいまご紹介いただきました名古屋の同朋大学の田代でございます。私どもの同朋学園は、同朋大学と名古屋音楽大学と名古屋造形芸術大学を擁しておりますけれども、親鸞聖人のお心を建学の精神にしている大学でございます。そういう意味では皆様方のこの大学と大変親しい関係にあります。

さて、今日は「死そして生を考える——国境を超えた “いのち” の学び——」という、少し趣の異なったテーマを出させていただきました。と申しますのは、私自身数年来、そのようなことを課題としておりまして、様々な角度からそういったことにとりくんでおるゆえです。

今日はそのような中で、私なりに教えられ、気づかされたことを皆さんにお話し申しあげていこうと思います。

一、なぜ死が問われてきたのか

そこで今日は死ということ、あるいはいのちということを申しあげたいのですが、どうして今このようなことが大きな課題になってきたのでしょうか。皆さんが本屋さんへ行きましても、「死の本のコーナー」というのが大変大きな場所を占めるようになってきていると思います。このようなことは今から一〇年前では、考えられないことでした。実は私は名古屋で自分の研究室に事務局を置きまして、お医者さんや看護婦さん、ソーシャルワーカーや、あるいはガンの患者さん、あるいは高齢者の方、その家族の人たちなどと「死そして生を考える研究会」という研究会をしております。ちょうど七、八年前に始めたのですが、今では会員が八〇〇名近くおります。毎月の研究例会に皆さんがやって来られるわけなのです。七、八年前に私がその会を提唱してつくり始めたとき、マスコミの人たちも一生懸命にバックアップしてく

死そして生を考える

れました。しかし、その当時、「死」といったときに、大抵の人は首をかしげました。例えば、発起人のなかにお医者さんたちも何人かおられましたものですから、病院で打ち合わせ会をしたこともありました。病院で「死そして生を考える研究会・打ち合わせ場所」という張り紙をしてもらいましたら、受付の事務員さんが変な顔をなさったというエピソードがあります。それほど「死」ということがタブーにされていました。

ところがそれが今や、先ほど申しましたように本屋さんにおきましても大変大きなウェイトを占めるようになってきたというのはどうしてなのでしょう。どうしてだと皆さんは思いますか？まず第一番目は、日本の社会が大変な勢いで高齢化社会になっているということです。

それこそ西暦二〇〇〇年には、どの先進国も経験したことのないような高齢化社会になっているのです。そういうなかで老いていく人たちが、といいましても私たち、皆さんも一緒に老いていく身なのですが、その老いていく者がその老いをどのように受け入れていくか。あるいはその老いていく人たちにどう関わっていくかということが大きな問題になってきました。

近頃、目新しい言葉として「シルバー・ハラスメント」という言葉をととき新聞や週刊誌などで見かけることがあります。この「シルバー・ハラスメント」という言葉の意味は、

「老人の虐待」ということです。痴呆症の老人の方、あるいは寝たきりの老人の方に、つい辛い辛くあたっていじめてしまう。長く介護をしておりますと、その介護疲れのなかで、それこそついつい手荒に扱ってしまふ。あるいは、ふすま一枚隔てた向こうでは、若夫婦が快適な生活を送っているというのに、ふすま一枚隔てたこちら側では、朝におにぎり三個置いておくだけで放ったらかし、布団も腐り、畳まで腐っていても、知らない顔をされているという現状も報告されているわけです。

その高齢者の人たちに私たちがどう関わっていくか、周囲の者がどう関わっていくかということは大変大きな問題です。その高齢者の問題は高齢者だけの問題ではございません。人びとすべての問題であるわけです。そういうなかで、例えばひとつ、ある方からいただいたお手紙をご紹介します。この方は沼津市にお住まいのヘルパーをしていらっしゃる方で、私どもの研究会のことをいろいろな番組でたまたま御覧になった後にお手紙を下さいました。

前略、御免ください。NHKに問い合わせました。私は五六歳、現在、伊豆長岡にあります老人病院（片道キップの病院とさえ思われている）、〇〇病院のヘルパーをしております。当病院には身寄りのない方、生活保護の方、孤独な方、いろいろなケースがありま

死そして生を考える

す。そんな方が常住で一五〇名ぐらいはおられ、こんな言い方は辛いのですが、亡くなる順番を待つ日々といっても過言ではないのです。さらに人として、人の親になりながらこんな寂しい死を迎えられる方が末期の水も飲まされず、たぶん嘆き悲しんでいかれるのでしょう。

母が亡くなった後、もとの調理師の仕事に戻ることも考えましたが、私を心の頼りとする患者さんを見ると逃げることもできませんでした。今、私は親を看るつもりで一人でも多くの人のお世話をし、その方たちが「ありがとう」といえる最期をと願うのです。終わり良ければすべて良しということもあります。たった一度でも「ありがとう」といえた方は救われたのだと思います。

動けない人、口の聞けない人、みんな人です。人としての主張を何らかの形で示します。それを理解できなければ、ヘルパーはヘルパーではありません。老人に敬意をもち、いたわりをもつことができなければ、ヘルパーは務まりません。私は先生たちの行われている活動に全面的に共鳴します。もう重篤になられ、本棟個室に入られると、モニターをつけられ、排便ももうなく、口にされるものもなくなります。そのような方の下のお世話をす

るときは、ただ祈るのみ、「がんばって」といってみても死のゴールへのエールでしかないのです。その部屋を出るとき、わたしは水を含ませて出てくるのですが、末期の水はきつと差し上げられないだろうと思う私の気持ちがそうさせます。お声も出ないはずの方が、「ありがとう」と申されます。聖なる声とはこのことではないかと思うのです。

悲しみを越え、ありがたい歓喜を私は感じ、心の手を合わせます。先生たちのやっておられるデス・カウンセラーになるには、どうしたらいいのでしょうか。お仲間に入るにはどうしたらいいのでしょうか。通信教育はないのですか。

こういったお手紙なのです。そこに老人医療の現場の切実な問題が表れていると思います。

国のほうでは、ゴールドプラン、都道府県では福祉八カ年戦略、そしてこの三月には各自治体が老人保健福祉計画というのを策定いたしました。実は私自身も、愛知県のいくつかの自治体の策定に関わっていたのですが、しかしこのようなところでなされることは、ショートステイをどうするか、老人ホームをいくつ建てるか、あるいはデイケアサービスをどうするのかと、そういうところに終始しているわけです。そのようなこともどんどん推進すべきですが、しかしそれだけで私たちが本当に素晴らしい人生であったと言い得るかどうか。

死そして生を考える

この日本において、高齢者の自殺率が先進国の中ではトップであるということを考えれば、そのことの問題性ということがわかりいただけるのではないかと思います。そういう高齢化社会のなかで、いのちということが問われてきました。それがまず第一点です。

それから第二点目は、ガンとかエイズとか、治らない病の患者が大変多くなってきたということです。これはもはや他人事ではないのです。平成三年の統計でございますが、日本人で亡くなる方のなかで、ガンで亡くなる人の割合は二六パーセントなのです。つまり、四人に一人以上の方がガンで亡くなるというご時世なのです。ですから、決してこれは他人事ではない。皆さんのご親戚のなかに、あるいはご家族をガンで亡った方もいらっしゃるのではないかと思います。

そういう現実のなかで私たち自身がその死を、病をどう受け入れていくのか、また周囲の私たち、家族がそうなったときにそれをどう支えていくのかということが、また大変大きな問題なのです。

そのなかでとりわけ大きな問題になってきているのが、告知の問題です。昨年の白書なのですが、厚生省の統計によりますとガンの告知率、病院でお医者さんが「あなたはガンですよ」

と告知する割合というのは、一八・二パーセントなのです。ですから医者さんは、「あなたはガンですよ」と五人に一人にもおっしゃらないのです。

ところが実際に現場ではどうかといいますと、お医者さんから「ガンですよ」といわれなくても、たいていの人は察知しております。私は「察知」という言葉を遣っているのです。それはそうでしょう、がんセンターへ入院していて、自分がガンであるということに疑いをもたない人はいないのです。あるいは隣に一緒に入院していた人が、抗ガン剤で毛が抜けて、痛みを訴えて、やせ細って亡くなっていったりすると、その人が亡くなる一カ月前、二カ月前に飲んでいた薬と同じものを今自分が飲んでいるとすれば、やがて自分がどうなるかということは、これは自明のことでございます。ところがその患者は家族を配慮して、自分からはいわずに知らないふりを演じているわけです。家族も本当のことを知っている。本人も本当のことを知っている。しかし家族は本当のことをいわない、本人も知らないふりを演じている。するとそういう場ではだまし合いながら、つまり、長年連れ添ってきたご夫婦が信頼関係を失ったまま、死を迎えていかなければならないというのが現状なのです。皆さんは、このような現状をどうお考えになりますか。それは皆さん自身の問題でもあるわけです。

死そして生を考える

このような問題というのは日本だけの問題ではなく、世界的な問題なのです。アメリカではHIVの感染者が二五〇人に一人です。成人だけでいえば一五〇人に一人がエイズ、HIVの感染者なのです。その意味ではそういった問題が大変切実になってきております。そういった国際的なことは後半で申しあげようと思いますが、そういうなかで今、いのちということが問われてきています。

例えば、愛知県に「あつみの会」という会がございます。これは、『中日新聞』の「暮らしの作文」がご縁でできた文章サークルです。会員は全員、肉親をガンで失った人たちです。もともと私たちの研究会とは会員が重なっております、大変親しい関係の会なのですが、その「あつみの会」で会員を対象にアンケートをしました。そのなかに、こういうことが書いてあるのです。「告知しましたか?」、という設問のなかのコメントなのですが、「死後、妻に心配をかけないよう、だまされていようという日記を読んでショックだった」。ご主人は妻に心配をかけないようにだまされていようと日記に書いていて、それを後で奥さんが読んで、大変ショックだったということです。あるいはこういったものもあります。「看護するなかで、一番辛かったことは?」、という設問に対して、「何といっても嘘をつき通す辛さです。日ごとに弱って

いく人を見ながら、いつも笑顔をしていなければならない。屋上で、洗面所で思い切り泣いて、部屋に戻ると、そこには死を前にした人がいて、自分の不在を詰問する。病人の神経は鋭くなっています。いろいろ話し合っておきたかったが、病名を告げていないので、それも思うに任せなかった」と、このように何人もの人が書いてらっしゃるわけです。

なかにはこんなことも書いてあります。「告知した後の様子は？」、という設問に対して、「四〇年余りの年月、これほど一体になったことはなかった。一日一日が貴い時間だった。二人だけの貴重な日々が送られた」。「父とあまり話すことはなかったが、告知後は二人でゆっくり話す機会ができた」。「教えてくれてありがとう」といった。そして自分一人ではどうにもならないから力を貸してくれといい、以前よりとてもおだやかになった。死を覚悟してから家族や兄弟に今までの礼を言い、死後のことを依頼した」と。死ということ、これは避けることのできない問題です。いくらお金があっても、いくら社会的地位が高くても、死は平等に訪れます。その死を、われわれがどう受け入れ、超えていくか。まさにそのことが私たち一人ひとりとって大変大きな課題になってきているのです。

それから三番目に、生命倫理の問題があります。新聞を見ていただきますと、脳死とか臓器

死そして生を考える

移植とか、あるいは凍結受精卵だとか、代理母とか、遺伝子治療というような記事が毎日のように出ております。これはアメリカの話なのですが、つい先頃も三つ子の赤ちゃんの写真が新聞に出ていまして、三つ子の赤ちゃんなのですが、上の二人は三歳、下の子は生まれたばかりだということです。どうしてだかお分かりになりますか。受精卵を卵分割したときに、三分割のときに三つに分けます。そうしますと、一卵性の三つ子の受精卵になるわけです。そのうちの一つを凍結保存して、二つを母体に戻して、双子で生んだ。そしてその子たちが三歳になってから、もう一人子どもが欲しいからといって、凍結受精卵をもってきて、母体に着床をさせて生んだ。だから、三つ子なのですが年が二歳違うというわけなのです。すでにアメリカでは、そういうことをやっております。

あるいは胎児の脳細胞をパーキンソン病の治療に使うとか、あるいはシングルの女性がシングルのままで子どもがほしいとすると、精子バンクから精子を買ってくるのです。これはNHKの番組でも放送されていきましたから、ご覧になった方もあると思います。するとそこで、どうせもらうのなら知能指数の高い人の精子がいいのではないかということになり、そこで優生主義ということになっていくわけです。

日本でも脳死臓器移植の問題が大変大きな問題になってきています。しかし、それはもう医学の問題だけではないのです。哲学や宗教の問題でもあるし、あるいは法律の、法学の問題でもあるわけです。実は私の専門は真宗学なのですが、名古屋大学の医学部や医療技術短期大学でも授業をもっておりますし、倫理委員会の委員もしております。つまり医学の分野でも、とりわけ宗教的な立場での生命論というものが大変重要だと認識されてきているわけです。もちろんアメリカやヨーロッパなどでは、宗教的な立場をもっと重んじておりますけれども、日本でも次第にそういったことがきちんとなされると思っています。

そういう問題は大変大きな問題であるわけですが、もっとショッキングなニュースもあります。私は毎年夏に、ブラジルのリオデジャネイロ大学、アラスツーパーのトレード大学に三週間の特別講義に行っております。向こうに行っているときに、非常にショッキングなニュースがありました。それは臓器移植を目的に子どもを誘拐するというような事件なのです。そして新聞には「心臓八万ドル、腎臓三万五千ドル」とそのように書いてあるのです。そんな新聞記事も実際に今持っております。

それをどう考えたらいいのでしょうか。まさに、人のいのちがそういう形で扱われている時代

死そして生を考える

なのです。あるいは、これもNHKの番組でご覧になったかと思いますが、私どもも大変親しくしている福山大学の粟谷先生が研究なさっているのですが、フィリピンとかあるいはインドでは、公然と臓器の売買がなされております。中国では、囚人から臓器を取り出すことが認められております。このような国々では人のいのちをどう考えているのか。人権よりも、もっと根幹的な問題です。

かつてナチスドイツがそういう価値観で、「価値なき生命の毀滅」を唱え、障害をもった人びとを大量虐殺しました。まさにわれわれが今、いのちということを軽視するなかで、それがビジネスと結びついて、とんでもない方向に行こうとしているわけです。ただそのような情報が市民のところまで届いてこないのです。先端医療のところだけでなされているが故に、まだ大きな問題になってきていないという気がするわけです。

このように、高齢化社会が問題となり、あるいはガンやエイズなど治らない病の患者が多くなった。そしてそういう現状のなかで、生命倫理、つまり、いのちとか死ということが大変深く問われてきて、大きな問題となってきたというわけです。そこで翻りまして、現代人のわれわれは、いのちに対してどういう見方をしているのかということを中心に申しあげましょう。

二、現代人の“いのち”観

第一番目は、現代の私たちはいのちを物のように見ております。「いのちのモノ化」です。今の臓器移植の話にしましても、まさに二台の中古車をもってきて、一台の動ける車を作るような発想なのです。非常に合理的な発想です。西洋的な価値観に立つと、人間というのは万物の霊長なのです。人間が一番偉いのです。自然も家畜も人間のためにあるのです。人間にとって都合が悪くなるから、自然や家畜も大事にしましょう。動物も大事にしましょうという発想なのです。なぜなら、あのノアの方舟に乗せられた家畜は人間のためのものなのですから。それが西洋的な生命観です。

それに対して東洋ではどうかといえば、東洋では一切のいのちが平等である。木のいのちも、草のいのちも、虫のいのちも、人間のいのちもみんな平等だ、ひとつのいのちだという発想なのです。いのちがモノ化されているという中で、例えばこういったことを仏教のなかで学ぶことができます。お釈迦様がお生まれになったときに、七歩、歩いて、「天上天下唯我独尊」と

死そして生を考える

いわれました。これはどういう意味なのでしょう。降誕会などでお聞きになると思います。これは私だけが一番偉いんだよという意味ではないのです。天にも地にも、かけがえのない私一人のいのちの尊さに出会う。するとあらゆる生きとし生けるもの、すべてのいのちの尊さに出会うということなのです。

例えば一つ、そういうことを示す具体的な事例を申しあげましょう。私どもの研究会で、あるとき一人の名古屋のNTTに勤めておられる方が発表してくれました。その方は、お歳は私よりも少し年上でございました。今年の一月七日に乳ガンで亡くなってしまわれたのですが、その方が最初に乳ガンのしこりを発見して、そしてその不安な日々、そして入院、手術、退院、その後と、折々の思いを本につづっていらっしゃるのです。『マンマの記』という題の本です。「マンマ」というのはラテン語で「乳房」という意味で、乳ガンですからそういうタイトルなのです。彼女は、研究会に来られて会うたびに、「先生、私は手術から三年経ったけれども大丈夫だよ。再発しないよ」、あるいは「この前の検査はパスだったよ」と、それこそお会いするたびに一日一日いただいているという感じでおっしゃっておられました。

その方の『マンマの記』の退院のくだりにこういう一節があるのです。「病院の玄関を出た

途端に、まぶしく輝く風景を見た。家が、道路が、街路樹が輝いている。美しいという言葉は当てはまらない」。あるいは「このごろはアスファルトの割れ目に生えている雑草までもが、愛おしく思えるようになりました」。そう書いているのです。さあ、どうしてそう思えるのでしょうか。入院するときは病院までの景色も、玄関の景色も見慣れた景色だから何とも思わなかった。乳ガンの手術をして玄関に立ったら、それらが輝いて見えたということです。どうしてですか。

あるいは別の方が、こんなことをおっしゃってくれました。お勝手に立っているとゴキブリが出てきました。つい横にあるスリッパか週刊誌を丸めて、いつもパンと叩いていた。ところがその方は大腸ガンの手術をしまして、家へ帰って来た。同じようにゴキブリが出てきました。反射的に横にあった週刊誌を振り上げたのだけでも、もうその週刊誌を振り下ろせなかったというのです。なぜだと思えます。どうしてでしょうか。

死ぬほどの目に遇ったがゆえに、自分のかけがえないいのちの尊さに出会ったわけです。ですから、天にも地にもかけがえない自分のいのちの尊さに出会ったら、生きとし生けるものすべてのいのちの尊さが見えてきたわけです。たかが雑草、たかがゴキブリのいのちの尊さ

死そして生を考える

も見えてきたのです。ですから、仏教では殺生をしてはならないというのです。同じいのちなのだから。ところが殺生をしないと私たちは生きてはいけないわけなのです。いのちをつないでいくことができない。そこで「いただきます」というのです。「いのちをいただきます」というのです。つくってくれた人に感謝していただきますという意味もないことはないのですが、「いのちをいただきます」という意味なのです。そういう心の痛み、そういう問いかけがあるところに、無益な殺生にブレーキがかかるわけなのです。私は、いのちの教育のまず第一歩は「いただきます」からだと思うのです。

現代のわれわれのいのち観の第二点目として、「死のタブー視」ということがあります。死という穢らわしいとか、縁起でもないと思います。ところがどうなのでしょう。例えばお葬式から帰ってきて、塩をまくということをします。考えてみると、あれは不思議なこと。私をとてても可愛がってくれたおじいちゃんやおばあちゃんが亡くなって、そしてその死を穢らわしいといって塩をまいているのです。私を一生懸命に育ててくれた父や母が亡くなって、その死を穢らわしいといって塩をまいているのです。変だと思いませんか。変ですね。

そのように死ということをタブーにする。見なくする。社会そのものが死をだんだん見えな

くしてきております。近ごろですと、家庭で亡くなる人はほとんどいないのです。私の研究会のあるお医者さんが、「自分は二〇数年間開業医をしていて、死亡診断書を書いたのがわずかに二、三通だ」と、いつかおっしゃっていました。それほど皆さん、病院で亡くなるわけです。そこで病院へおじいちゃんが入院したとします。するとお母さんは子どもたちに、「病院なんかへ行ったらだめですよ。雑菌がうつるから、院内感染をするから」といって、あまり行かせないようにさせます。そしておじいちゃんが病院で亡くなります。病院で亡くなったら、遺体は霊安室からお葬式の式場、お葬式の式場から火葬場へと持っていけます。少し前ならそのお骨はお家の仏壇へ帰ってきていたのですが、今やお仏壇もなくなった家庭が多いですから、その白い木箱は納骨堂へ直行なのです。子どもからすると、おじいちゃんが突然いなくなっておじいちゃんはどこか遠いところに引っ越していったよ、という発想をするのです。死ということがだんだんと私たちの目の前から遠のきつつあるのです。

そのように死ということを見つめない、遠くへやるということが、逆に死に対する不安とか恐れを掻き立ててくるわけです。有名な俳優さんで、大霊界などといって人がありますけれども、死が見えないから、そういったことがはやるわけです。オカルトとか迷信とか占いか

死そして生を考える

いうものがはやるわけです。死後の世界があるとかないとか言いますが、「ある」といって皆さんは信じられますか。また、「ない」といって信じられますか。「ある」といえば「ある」という思いに囚われていきます。「ない」といえば「ない」という思いに囚われていきます。死ぬまでかかってでも解決はつきません。

そのように考えること自体が冥界入り、迷宮入りなのです。死後の世界が冥界、迷宮ではないのです。考えて出所がないことが冥界入り、迷宮入りなのです。かつてインドで、ある人がお釈迦さんに、「死後の世界はあるのですか、ないのですか」と尋ねました。するとお釈迦さんは、「あるかもしれないし、ないかもしれない。それは不思議だ。思議を超えたことなのだ。だから考える必要のないことだ」といったのです。ですから思いを超えたことを考える必要はないのだということなのです。考えても出口がないのです。思いを超えたものは思いを超えたものとしておけばいいわけです。

そのように、われわれは死ということをタブーにしております。けれども逆なのです。それをきちんと見ていく、見つめていくというところにそれを超える道、あるいはその不安を取り除いていく道があるわけです。暗い夜道を歩いていて古いロープでも落ちていると、遠くから

歩いて来るとヘビじゃないかと思ってブルブルと震えます。ところが近くへ行ってみると「なんだ、ロープじゃないか」ということになるのです。そのように見えないということが逆に恐れや不安をかりたてるのです。あるいは見つめるということが、それを超えていくことなのです。

仏教では無常といいます。「諸行無常」。例えば、文学などをおやりになっただけの方では御存知だと思いますが、『平家物語』の冒頭に、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」と出てまいります。いのちは無常です。いのちは常ではない。常ではないものを、われわれは常だと思っているから苦しまねばならないのです。例えば、老いの問題を考えましょう。私の頭のなかでは、私はいつまでも若いと思っているのです。ところが鏡を見ますと白髪ができ、しわができていくわけなのです。そこで思うのです。若いはずの私が、どうしてこんなに白髪ができ、しわができるのか。「若いはずの……」という思い込みが苦しみの原因なのです。鏡に映っている事実を見れば白髪ができ、しわができていく。人は誕生の瞬間から、着々と老いていく身なのですから、白髪ができ、しわができて当たり前なのです。その事実が気がついたときに「若いはずの……」という自分の思い込み、仏教ではそれを「虚妄（こもう）」とい

死そして生を考える

いますが、その虚妄が破れるのです。

病の問題も同じなのです。私の頭のなかでは健康が当たり前だと思っています。健康が当たり前なのに、どうして自分が入院しなくてはいけないのか、世の中みんな幸せそうに暮らしているのにということ、あっちに祈り、こっちに祈りしている間に病気はどんどんひどくなっていくのです。違うのです。健康が当たり前ではないのです。生身の身体なのですから、健康なときもあれば、病むときもあるのです。病んで当たり前なのです。病んで当たり前というところに立って初めて、その病を受容していくことができるわけです。

死も同じなのです。われわれは、他人は死んでも自分は死なないと思っています。ところが違うのです。みんな死ぬのです。例えばテレビに出ていた逸見さんが亡くなった。「ガンだな、可哀想だな。お気の毒に」と、それですんでいるのです。ところが身近な人だったらどうですか。皆さんの彼氏が白血病で亡くなったとか、あるいはお父さん、お母さんのどちらかがガンで亡くなったとします。身近な人の死であればあるほど、それはより自分の事として受け止められてくるのです。自分の死の疑似体験になってくるのです。

われわれは、死すべき身だということに気が付いたときに初めて、その死を受け入れてい

くことができるのです。死んで当たり前だというところに立って初めて死が受け入れられるのです。死なない、死なないと思っているから、余計に苦しみになるのです。ですが、たった一つ、死なない方法があります。今日は、光華女子学園の皆さんに特に大サービスで伝授しましょう。

私の教室にはおもしろい学生がおりまして、私が死の問題ばかり扱っているものですから、学生も卒業論文に「死の〇〇の考察」「仏教における死生観」といった論文ばかり書いているのですが、ある日、学生が私の部屋に來まして、「先生、おもしろい本があります。中に死なない方法が書いてある」というのです。私も、「どれどれ」といって見てみたのです。確かに死なない方法と書いてあるのです。その横に、「次のページを見よ」と書いてあります。次のページをめくったのです。すると「生まれてくるな」と書いてあるのです。生まれてこなければ死ぬ必要はないのです。だけど皆さんはもう生まれていますから、もう手遅れなのです。死すべき身なのです。

ですから老いて当たり前、病んで当たり前、死んで当たり前というところに立って初めて、その老いとか病とか死ということが受け入れられるわけなのです。あるいはもっと死というこ

まぼろしのごとくなる一期なり。(中略)我やさき、人やさき、きょうともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もとのしずく、すえの露よりもしげしといえり。朝には紅顔ありて夕べに白骨となれる身なり。

朝、健康な赤ら顔があっても、夕べに白骨となれる身なのだ。あるいは「出づる息、吸う息を待たず」ともいいます。一呼吸の間に命が果てるかもしれない。

そのことを思ったとたん、悠長なことはできなくなるのです。われわれは明日もあるし、来年もあると考えています。私も手帳に予定をたくさん入れていますけれども本当に死ということを考えてときに、一瞬たりともおろそかにできなくなるのです。文字どおり「今を生きる」という営みが始まるわけです。その今というのは、時間、空間の一点の今ではないのです。先ほど学長先生がお読み下さった、あの三帰依文、「人身受け難し、今すでに受く、仏法聞き難し、今すでに聞く」の「今」というのは、いつの今ですか。平成何年何月何日という、あの今ではないのです。いつも今なのです。臨終の瞬間、死の瞬間まで、いつも今なのです。ですから「今を生きる」というのは文字どおり、死の瞬間までいつも今を生きることなのです。

鎌倉時代の親鸞という人は、その死の問題を臨終まで放っておくのではなく、今、考えるべ

死そして生を考える

きなのだ、今、その死に応え得るだけの生に出会うべきなのだといっているのです。

臨終待つことなし、来迎たのむことなし。

これは親鸞聖人の『末灯鈔』というお手紙のなかの一節です。死の問題を臨終まで放っておくのではなく、今、問うところに逆に、死に応え得るだけの生に出会えるのだと。それで私どもの研究会の名前、それに今日の講題も「死そして生を考える」としているのです。死から逆に生が問われてくるのです。

ですから、よく生きるということは、よく死ぬるということなのです。よく死ぬるということは、よく生きるということなのです。こういう発想がヨーロッパの人にはなかなか理解してもらえないのです。英語でもフランス語でもポルトガル語でも、「生」という単語はあるのです。「死」という単語もあるのです。ところが「生死（しやうじ）」という単語はないのです。仏教には、東洋思想には生死という言葉があるのです。

そうしますと文字どおり死すべき、その事実に出会ったときにいのちということが見えてくる。あるいは生きるということの意味も見えてくるのです。ところが、われわれはそれをタブーにしてしまっているわけです。とんでもない話です。

三番目は「いのちの所有化」ということです。現代の西洋的な価値観で教育を受けたわれわれは、自分のいのちは自分のものだと思っています。ところが皆さんどうですか、本当に自分のいのちは自分のもののですか。自分のいのちは自分のものだ。二〇代でこうして、三〇代でこうして、五〇代でこうして、六〇代でこうして定年を迎えて、七〇代で悠々自適の生活をして、八〇代まで生きたら平均寿命で人並みだ、九〇歳になったらもうけものだ。一〇〇歳になったらタレントになれる。紅白歌合戦のオーブニングに、こたつに座って出られるという、大変な方が名古屋にはおられます。一〇〇歳でタレントになった方がお二人もいらっしゃるのです。

そのように私たちはいのちを所有化して、いろいろ自由に描いています。けれども、皆さんどうですか。振り返ってみて、描いた通りになってきましたか。私は四二歳なのですが、その四二年という人生を振り返りまして、何ひとつ思いどおりになりませんでした。いのちは自分のものだというならば、では皆さんは自分の力で生まれてきましたか。「私は生まれるんだ」とか「私の意志で生まれてきたんだ」という人があったらお会いしたいです。誰もそんな人はいないのです。父があり母があり、祖父があり祖母があり、連綿と続くご縁の連続によって、

死そして生を考える

私たちというのはそれぞれに存在しているのです。それを仏教では「因縁所生^{いんねんしよじょう}」といいます。

死についてもどうですか。アメリカではアート・オブ・ダイイングという考え方があります。死を彩るということです。日本でも私の友人で東京の駒沢大学の先生で、『上手な死に方』という本を出した人がいます。私はその先生からその本を贈っていただきまして、すぐそのあとで高野山大学で学会がありましたときに、その先生にお会いしまして、「先生、上手に死ねますか」と冷かし半分に尋ねました。皆さんどうですか、上手に死ねますか。

誰も寝たきりになりたくない、痴呆症になりたくないと思っています。けれども、今、寝たきりになっている人も痴呆症になっている人も、好き好んで寝たきりになっているわけではないのです。死も思いどおりにならないのです。思いを超えた死、思いもよらない死というように、死もやはり思いを超えたものです。少し哲学的な用語ですけれども、生も死も「不如意」なのです。思いどおりにならないのです。私と皆さんと共にいのちを考えているこの瞬間にしても、思いもよらない出会いだと思ふのです。皆さんがご都合悪ければこの出会いはありませんし、私も都合が悪ければこの場におれません。この出会いにしても、思いを超えた出会いなのです。

すると誕生も思いを超えたもの、死も思いを超えたもの、日々の営みも思いを超えたものです。その思いを超えた大きなものに、私たちは生かされ支えられているわけです。その大きな絶対無限の妙用みょうように生かされ、支えられているのです。例えば『西遊記』の孫悟空の話をご存じだと思います。孫悟空は、孫悟空というぐらいますから、「空(くう)」を悟った人なのです。人間を成就したサルです。あの物語はその孫悟空が金斗雲に乗って三界を經巡りまわっても、仏様の大きな手の中だったというおちでしたね。

つまり、その大きな手、私の思いを超えた大きなものに私たちは生かされ、支えられているということなのです。私たちは、このごかしい頭で自分のいのちとかがいます。ところが私の思い以前にいのちはあるのです。三歳か四歳になって自我に目覚めてきて、思考が確立してきて、そのときに自分のいのちといっているわけですけれども、それ以前にいのちはあるのです。いのちは、やはり思いを超えたものなのです。その思いを超えた無限の世界、それを絶対無限の妙用とか、あるいはそういう私たちを生かしめ、支えてくれるその大きな世界を「無量寿」とか「阿弥陀」というわけです。阿弥陀とは、サンスクリット語で「無限」という意味なのです。

死そして生を考える

そして、問題はその自己を超えたものに頭が下がるか否かということなのです。頭が下がるという言葉が「南無〈nāmas〉」というサンスクリット語なのです。頭が下がる、つまり自己を超えたものを仰ぐということです。

ところがいのちというのはそのように思いを超えた大きなものに生かされ、支えられているのに、それをわれわれは所有化して、上手に死のう、格好良く死のうとする。しかし、思いどおりに死ねるものではないのです。親鸞聖人はお手紙の中で、「善信が身には、臨終の善惡を申さず」とおっしゃっています。善信というのは親鸞聖人のことです。私の身には臨終の善し悪し、良い死に方、悪い死に方をいわないという意味です。上手に死のう、上手に死のうと思えば思うほど苦しみなのです。格好良く死のうと思えば、思うほど苦しみです。なぜなら思いどおりにならないものを思いどおりにしようとするのですから。ならばどこが一番落ち着けるかといえば、痛いときは痛いといい、苦しいときは苦しいといい、どんな死に方をしても良しと腹がすわったときに一番落ち着けるのです。そこが、その死ということを受け入れていく一番大きなポイントです。

三、いのちの教育、デスエデュケーション

今申しました、このような命の問いかけ、こういった事柄は今や世界的に学問として確立し始めました。こういう学問をタナトロジー、あるいはサナトロジー、ないしはそういう教育をデス・エデュケーションといいます。かつて一九四〇年代に、ボストンの郊外で火事があり、そのときにハーバード大学の心理学の先生が、その火事に遭った人たち、家族の人たちに対してアンケートをしました。そのアンケートが各学会から大変に注目を浴びました。その結果、死というテーマについて、医学、心理学、社会学、宗教学、哲学、法学といった様々な分野で学際的な研究が始まったのです。

すでにアメリカでは、このような研究の国際学会が開かれております。日本でももうすでに、バイオ・サナトロジー学会というのでできております。これは産業医科大学の土屋健三郎先生が学会長で、私どもも評議員で加わっております。あるいは、こういった私どものようなのちを問う研究会というのは各地にできております。

アメリカでは、一九六〇年代になりますと、医学部、薬学部、あるいは看護学部でそういっ

死そして生を考える

た講座が開かれるようになりました。そこで、大変有名になった人が、あのエリザベス・キューブラー・ロスです。『死の瞬間』という本の著者です。読売新聞社から川口さんという人が訳しまして出版されています、日本でも大変売れた本で、「死に行く過程の五段階のチャート」などということが出ています。アメリカではやがてさらに、一般の学部でも講座が開かれるようになりました。実を言いますと、今夜の飛行機で私はハワイ大学のほうへ、この問題で特別講義に行くのですが、ハワイ大学でも「デス・アンド・ダイイング」という形で、その講座が開かれております。今や全米のほとんどの大学で、死に関する講座が開かれております。

先ほど申しましたように、夏にはブラジルのほうへも行っておりますけれども、ブラジルでもそういった講座が開かれておりますし、ヨーロッパでも開かれております。アメリカなどでは州によって違いますけれども、カリフォルニア州やフロリダ州では、小学校でもこのデス・エデュケーションをやっているのです。これは一番新しい学問なのです。しかし、その学問を突き詰めていったアメリカの人たちは何に出会ったかといいますと、行きついた先は東洋の思想、仏教だったのです。

すなわち、私が先ほどからいろいろと申しあげてきたこと、つまり、無常や無我とか縁といっ

た立場です。死について一番徹底して追求してきたのが東洋の思想の仏教なのです。なぜならお釈迦さんは、「生老病死」の課題を超えるということを目的として仏教をお開きになったわけですから、そういう意味では、私は仏教という学問を自分でやりながら、一番新しい学問だと思っています。

そういう形で、死ということが追求され、そして仏教に行きついてきたのです。例えば、昨年の年末に『チベットの死者の書』という番組が、二晩続きでNHKで放送されました。チベットの『バルド・トウドウル』というラマ教の経典をテーマにした番組です。ところがその冒頭で、アメリカのサンフランシスコのエイズホスピス、あそこはカミングホームホスピスというのですが、その状況が放映されました。エイズで亡くなる人に、その仏教の経典をテキストにして死を超えていく道を説いているわけなのです。

そのカミングホームホスピスを、私もアメリカの大学に行っているときにリサーチしました。そのダイニング・プロジェクト・チームというのがそのようなことを一生懸命やっているのです。なぜなら無常とか無我というのは、まさに死ということを受容していく原理だからなのです。皆さんはこの大学で、仏教の基礎的なことを学んでらっしゃいますね。私はそのことが

死そして生を考える

実は、今一番新しい学問になってきているということを申しあげていけるのです。そしてそういうことがアメリカでもヨーロッパでも南米でも、すでに注目されてきているのです。しかし残念ながら日本の大学では、まだその死生学の講座は開かれていません。

しかし、このことはたいへん重要なことだと思えます。最初に申しましたように日本は今後高齢化社会を迎え、またガンやエイズなどの患者がたいへん多くなってきました。そういう状況のなかでその死をどう超えていくかということです。

そこで最後に一つ、事例を申しあげてみたいと思います。これは私どもの研究会に関わっていた事例であります。この患者さんの実家のお兄さんとお父さんが私どもの研究会の会員でありまして、この方は岐阜県高山市の方で、四一歳で末期ガンで亡くなって逝かれました。そのときに三人のお子さんに手記を残して逝かれたのです。その手記をご遺族からのご依頼によって私の方で整理し、出版のお手伝いをさせていただきました。法蔵館から『子供たちよ、ありがとう』というタイトルで出版されています。普段、真宗の教えを学んでおられて、そして死を受容していったという事例であります。そこからのちを考える手掛かりを学んでほしいと思います。一部を読んでもみます。

ところでお母さんの病気の正式な病名は、手術の時点ではわかっておりませんでした。そのことについて説明をいただいたのは、手術後約半月経った、二月一〇日の午後のことでした。郡上のおじいちゃん、おばあちゃん、高山のおばあちゃん、そしてお父さんとお母さんの前で極めて明瞭に、藤本先生が腎ガンであったこと、肝臓にも直径二センチあまりの腫瘍が見られることなどが告げられました。

ガン告知については、現在の医療現場では一応タブーということになっているそうです。そんなことは知らないお母さんは、手術前に藤本先生に向かって、「私はまだ若いのでいろんな夢を持っているのですが、身体の状態によっては変更しなくてはなりません。自分の身体のこととは自分自身が一番良く知っていたいので、どうぞどんなことでも私に直接話していただきたいのです」とお願いしておりました。藤本先生はお困りになって、実家のおじいちゃん、おばあちゃんにご相談なさったそうです。そのときにおじいちゃんが、「娘はとっても敏感な心をもっています。たとえ本人に話さなくてもそのうち分かっちゃいます。どうぞ直接伝えてやって下さい」と答えて下さったそうです。

誠実なお医者様の思いやりと肉親の深い愛情によって、お母さんは自分の病気を正確に

死そして生を考える

知ることができたのです。周囲の人びとを何ひとつ疑うことのいらぬ今の安らかな生活を思うとき、本当にありがたいことだったと感謝するばかりです。あれから一年半になるうとしています。一日おきに病院へ通って打ち続けた抗ガン剤の効果もなく、肝臓の腫瘍は肺へと転移して、病状はどんどん悪くなっております。咳と微熱がお母さんの細い身体を苦しめ、血痰がひどくなるばかりです。でも、まだまだ日常生活ができるからうれい

です。

お母さんの願いは、とっても素直に自然のままに生きていくことです。だからといって素行君、素浄君（息子さんたちの名前）、どうぞ誤解しないで下さい。お母さんは死ぬために生きているわけではありません。生きるために、より良く生きるために今を生きているのです。

先ほど申しました「今を生きる」ということです。

それはたぶん、死の直前までそうなのだと思います。なぜならこの身体が精一杯がんばっていてくれるのがわかるからです。太陽の暖かさ、木々の緑があまりにやさしいからです。お母さんを取り囲んでいて下さる世界が、いつも「生きよ、生きよ」と声高らかに、こん

な病氣のお母さんまでを励まし、支え続けていて下さるからです。

今度は真ん中の由紀乃ちゃんという、障害をもったお子さんにあてた文章です。

由紀乃ちゃんは重症心身障害児という身をもって、お母さん、人は自分の力で生きていくのではないですよ、生かされ支えられてこそ生きていけるのですよ、と教えてくれたのです。自分が世界の中心であり、自分の力で生きているとばかり思っていたお母さん、何もかも思いどおりにならないと氣が済まなかったお母さんに、その心の愚かさ、醜さ、恐ろしさをはっきりと教えてくれたのが、あなたたちだったのです。

そのときお母さんは、あなたたちの母親として、まったくその資格のない自分に気づかされました。それは同時に人間失格の自覚でもありました。それからのお母さんは、深い命を持ったあなたたちの伸びようとする力を、できる限りじゃましないように、壊さないようにと思って生きてきました。この子に母親として、してあげられることは一体何だろうといういつも考えていました。だから今もそれを思っています。

今のお母さんにできることは何だろう。お母さんの病氣が、やがて訪れるだろう死が、あなたたちの心を与える悲しみ、苦しみの深さを思うとき、申し訳なくって辛くて、ただ

死そして生を考える

涙があふれます。でも事実はどうしようもないのです。

先ほどいいました「不如意」ということです。

こんな病気のお母さんがあなたたちにしてあげられること、それは死の瞬間までお母さんでいることです。元気でいられる間はご飯を作り、洗濯をして、できるだけ普通の母親でいること。徐々に動けなくなったら、素直に動けないからと頼むこと。そして苦しいときは、ありのままに苦しむこと。それがお母さんにできる精一杯のことなのです。

そして死は、たぶんそれがお母さんからあなたたちへの最後の贈り物になるはずで、人生には無駄なこととは何一つありません。お母さんの病氣も死も、あなたたちにとって何一つ無駄なこと、損なこととはならないはずで、大きな悲しみ、苦しみのなかには必ずそれと同じくらい、それ以上に大きな喜びと幸福が隠されているものなのです。あなたたちもどうぞ、そのことを忘れないで下さい。たとえ、そのときは抱えきれないほどの悲しみであっても、いつかそれが人生の喜びに変わるときがきっと訪れます。深い悲しみ、苦しみを通してのみ見えてくる世界があることを忘れないで下さい。それがお母さんの心からの願いなのですから

今度は、一番上のお兄ちゃんにあてた文章です。

あなたは覚えていないでしょうが、昔お母さんが由紀乃ちゃんの身体のことと悩み、一緒に死のうと思ったとき、あなたが助けてくれたんです。「お母さん、由紀乃ちゃんは顔も手も足もお腹も全部きれいだね。由紀乃ちゃんはお家のみんなの宝物だものね」。幼いあなたのこの一言が、お母さんの目を、心を覚ましてくれたのです。そして、それからはずっとあなたのおかげで生きてこれたような気がしています。お人形さんのようにかわいらしい由紀乃ちゃんが、重度の心身障害児であることを告げられてから一五年、ずっと重い一五年間でした。

眠れないままに、小さな身体を抱きしめて泣き明かした夜、お兄ちゃんと三人で、死ぬ機会をうかがい続けた辛い日々もありました。この子の人生は一体何なのか。人間としての喜びや悲しみを何一つ知ることもなく、ただむなしく過ぎていく人生など生きる価値もないではありませんか。大きな問い、無言の問い、由紀乃の問い。

今の、この由紀乃ちゃんという方は重度の脳性麻痺で、言葉もしゃべれないし、身体も動かせない。そこでお母さんは、生きる意味はどこにあるのか、ちっとも役に立たない、間に合わ

死そして生を考える

ない、生きる意味はないんだと思っていました。ところがお兄ちゃんが外から駆け込んで来て、「お母さん、由紀乃ちゃんはお家のみんなの宝物だもんね」といった。つまり、存在そのものに意味があるんだということに気づかされたのです。

それに気づかされた日から、お母さんは変わりました。確かに自分の手で選び取ってきた人生の責任を、一切、他に転嫁して愚痴と怒りの思いばかりで虚しく日々を過ごしてきたのは、実はお母さんのほうだったと思い知らされたからです。気づいてみれば、由紀乃ちゃんの人生は何と満ち足りた安らぎにあふれていることでしょう。食べることも歩くことも何一つ自分ではできない身体をそのまんまに、絶対他力の妙用に抱き込まれ、一点の疑いもなく、任せ切っている姿は美しくまぶしいばかりでした。こんな身体に生み落とした母親に対する恨みも見せず、高熱と発作を繰り返し日々のなかで、ただ一身に病気を背負い、今をけなげに生き続けているのでした。

由紀乃ちゃん、お母さんがあなたに対して残せるたった一つの言葉があるとすれば、それは「ありがとう」の一言でしかありません。なぜならお母さんの四〇年の人生が真に豊かで幸福な人生だったと言い切れるのは、まったく由紀乃ちゃん、あなたのおかげだった

からです。生まれてから今日まで、あなたはいつも全身でお母さんに語り続けてくれました。生きることの喜びを、悲しみを、そして苦しみを、限らない愛を教え続けてくれたのです。「そのままでいいのよ、お母さん。無理をしないといけないの。ほら、空も山もお日様も、みんなお母さんを励ましていてくれるでしょう。温かい大地がお母さんを支えていてくれるでしょう。」あなたの目は、いつでもそういつて笑うのでした。

由紀乃ちゃん、お母さんの病気は大変悪くなってきました。もう、あなたに会いに行くこともできそうにありません。自動車の小さな振動でも腫瘍で狭くなった肺を圧迫して、呼吸を苦しめるようになってしまったからです。遠い他県の国立病院にたった一人で入院中のあなたのことを思うたび、枕元ではほ笑むあなたの写真が、涙でかすんでしまいます。でも心残りはありません。なぜなら今日まで、あなたがお母さんの仏様であつたように、明日からはお母さんがあなたの仏様になるからです。

以上、抜粋でございますけれども、こういった形で死を超えていかれた方がたくさんいらっしゃいます。私どもは『ガン体験からの人生観』という本を出しているのですけれども、その中にはそのような事例をたくさん収めております。まさに仏教という教えのなかで、死を超え

死そして生を考える

ていく。そして今や、死についての学問、生死の学問が世界的な一つの流れとなってきたいます。そういうなかで、皆様方がこの光華女子学園、仏教の精神、親鸞聖人の精神を建学の精神にしている大学で学ばれているということを、私は大変素晴らしいこと、大変幸せなことだと思っております。医療における技術も大切なのですが、それとともにいのちに対する心の学びも大切です。きょうのお話で仏教に対する新しい視点をお持ちいただければたいへん光栄です。御静聴どうもありがとうございました。

—一九九四・十・二八—